

徳 朋

ひがまないこと

たかみつ かずや
高光 一也



たかみつ かずや

1907-1986

石川県出身。著名な仏教者である高光大船の長男。洋画家として多くの賞を受賞する。元専称寺住職。

仏さまの教えと申しましても、何も空中から降ってくるようなものではなく、浄土真宗の教えをくむ方たちなら朝夕のお勤めで拝読するご和讃や、蓮如上人の御文や、また歎異抄の言葉などで、身近に聞いているこうした文章がみな仏語なのであります。(中略) 寺の住職でもあるので、仕方なく朝の勤行を、正直なところは不精無精なんです、阿弥陀様の前にお勤めをするのです。そのとき拝読するお言葉が、この私の心にぴしゃりぴしゃりと響くので、仏様の言われることはなるほどなといつもいただいていることです。私のような何が真実か、何が嘘か、自分とはいかなるものか、人様とはいかなる方か、世間とはどういうところか、どこからきてどこへいくのか、さっぱり見当がつかず、したがって決定的な言葉の吐けないものに、これほど必要かくべからざる教えはないと思えるのであります。(中略)

人の言葉にはうっかり相づちは打てないもので、「私は至らぬもので」とおっしゃっても、「さようございます」などと相づちを打ったりすると、大変なことになるでしょう。だからそれは「至らぬ者」と決まっていなくて、言葉ではそう言っているが、年の功でみな至らぬものところおっしゃるだけで、至らぬ者になっていないのです。そういうふうにと定まらぬので

あります。お文に「^{けつじょう}決定」というお言葉がありますが、この文字は「^{けつてい}決定」という文字であって、はっきりと^{けつてい}決定することです。それが自分の言ったことがちっとも^{けつてい}決定していない、「私は利口だ」と思っても決定せず、「私は^ぐ愚なんだ」と思っても、少しは至らぬ者に決定しているかという、なかなかそういうわけではなく、おおかた「^ま至ってらっしゃる」ので、うっかり相づちも打てないのであります。(中略)

仏さまのおっしゃることが聞こえると、ぴしゃりと自分に決まるのであります。「^{まつだいむち}末代無知の在家止住の男女たらん輩は」(『^{おふみ}御文』)と言われ、^{むち}無知だぞとおっしゃられると^{むち}無知になるのであります。そういうところに人間の言葉と、いわゆる仏語との大きな違いがあるのであります。仏語は真実を教え、真実を語って下さるので、^{けんい}決定力を持った^{けんい}權威のある言葉であります。それで仏語に触れるというか仏さまの教えをいただくというか、こういうことはお互いに自分自身の言葉をはっきりさす必要からも、大切なことでなかろうかと思うのであります。



(『生活の微笑』)

「^{けんきよ}謙虚など自分の力では絶対に出来ない」という言葉がありますように、教えによって「至らぬものである」としっかりと教えられて^{けつてい}決定させられるものです。何気なく普段お勤めしている^{しょうしんげ}正信偈や^{おふみ}御文には、私たちが^{けつてい}決定させられる言葉で^{あふ}溢れています。

(哲弘 拝)



この「^{とくほう}徳朋」は仏教を^よ拠り所としている方々の言葉に^{じか}直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。